

〔文化〕

# 学ぶ、創る、 拓く市民を育む

文化活動は身近なところで、  
いつでも気軽に

かつて、暮らしの豊かさをモノで量った時代があった。人々に人気の高いモノを並べてみせた「三種の神器」や「3C」という言葉は、その時代の人々の心が何に向かっていたかをよく物語っている。いまそれらを手に入れてしまった私たちは、生活の力点を、モノの充足から心の充足へと移してきた。そして、心の豊かさをもたらしてくれるさまざまな文化・学習・スポーツ活動への関心を高め、自己研鑽に励む市民が増えている。

横浜市民を対象に行われた「市民意識調査」でも、「喜びや生きがいを感じていること」として、「趣味」や「スポーツ活動」をあげた人が四年連続してもっとも多くなっている。こうしたモノから心への価値観の変化の背景には、所得水準の向上によ

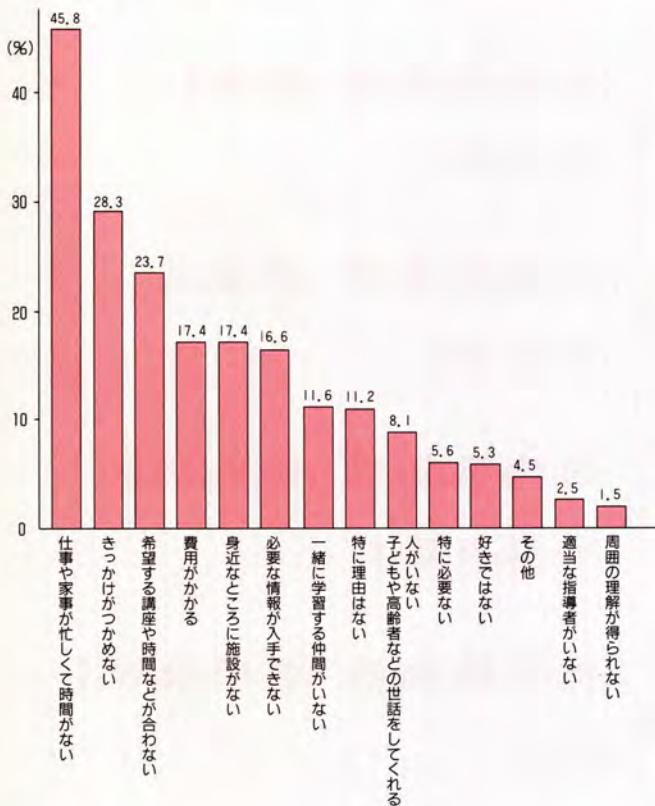
り経済的なゆとりが生まれたことや、労働時間の短縮などによる余暇時間の増大、それらに伴うライフスタイルの変化などがあげられるようだ。

だが、なにか活動を始めたいと思っている市民は多いが、実際に行動に移している市民はその数を下回っているのも事実である。それには、時間的な余裕がなかったり、情報不足などで参加のきっかけがつかめないうなど、それぞれの事情があるようだ。横浜市が平成五年一月に実施した「生涯学習に関する意識調査」でも、生涯学習活動をしていない理由として、「仕事や家事が忙しくて時間がない(四五・八%)」、「きっかけがつかめない(二八・三%)」をあげた人が多かった。

また、身近に活動の場のないことも、人々の活動意欲をそいでいる理由の一つといえそうだ。「市民生活行動調査」での「いま住んでいる街の今後のあり方」について

■生涯学習をしていない理由 (複数回答)

(生涯学習に関する意識調査・平成5年)



自主的に学ぶことによって、個性豊かな主体性が育まれる

の質問に、「もつと文化施設が充実する」と答えた人がもつとも多かった(三二・一%)のは、身近なところで文化・学習活動に取り組みたいと思っている人が大勢いることを示していると思われる。

文化・学習・スポーツ活動は、特別な日に、たまにやるものではなく、日常生活の一部として、いつでも学んだり活動したりできるものでなければならない。市民の知的好奇心がいつでも満たされる状況になれば、豊かであるおいのある生活の実現はむずかしいからだ。そのためには、自分の地域にそうした活動を行える場があることが望ましいのは当然といえる。

### 自己啓発から自己発信へ

現在、市内に四十六館ある「地区センター」は、そうした市民の活動意欲の受け皿として全市域で整備が進められている地域の文化・学習・スポーツ活動の拠点である。市民が、徒歩や自転車、バスなどで無理なく利用できる圏内に設置されているこの地区センターには、会議室、プレイルーム、体育室、料理室、和室、図書コーナーなどが備えられ、市民の多様な活動に対応できるようつくられているのが特徴だ。センターでは、個人やグループに自主的な活動の場を提供するとともに講演会や料理・手芸などの各種教室を開催して、活動意欲を持ちながら最初の一步がなかなか踏み出せない市民へのきつかけづくりや、意欲に燃える市民の活動の後押しをしている。

また各区に設置されている「区スポーツセンター」では、体育館やトレーニング室を完備、人々にスポーツ活動の場を提供するとともに、各種教室を開いて、子どもからお年寄りまで幅広い層がスポーツを楽しめるよう図っており、健康づくりに利用する市民も多い。

ところで、地区センターが地域で仲間となかを学んだり楽しむ場所であるとするなら、もう少し能動的に、自分たちでなにかを創造し、それを外に向かって発信したいという自己実現型の市民の活動に配慮のものとして建設されているのが「区民文化センター」である。

近年、文化活動に対する市民のニーズは、映画・演劇やコンサート鑑賞といった活動から一歩進んで、なにかをつくる、演じるといった、より創造的なものへとその幅を広げている。それまでの、共に学びあう、伝えあうといった、仲間づくり、コミュニケーションづくりを目的とした活動から、自らが創造しそれを発表するという、より表現意欲の強い活動へとその質が変化してきているのである。

こうした活動の広がりや継続によって市民の文化活動の水準もおおのずと上がり、より高いレベルをめざしていく結果、活動の拠点となる施設などへの要求も高度なものとなっている。こうした市民ニーズの変化に対応すべく整備が進められている「区民文化センター」には、演劇などが上演できるホールやミーティングルーム、カルチャークラバー、ギャラリーなどが備えられており、



今日も気持ちのよい汗が光っている

市民の文化鑑賞の場、参加・発表の場、学習・指導の場として多彩な機能を発揮中である。

平成二年八月に旭区民文化センター(サンハート)が第一号としてオープンしたのに続き、緑区でも平成五年四月に開設。泉区では平成五年夏の開館をめざして建設が進められている。今後、二〇〇〇年までに、すべての区に設置される予定である。

### 横浜固有の文化を育てる

文化は人間の精神活動によってかたちづくられるものであり、地域の人々の生活に根ざした活動から生まれるものは、共通の

文化的財産として市民の個性を育ててゆく。それは人々の生活にうるおいを与えるものになるだけでなく、横浜というまち全体をより魅力のあるものにする。

そうした市民の生活に根ざした地域文化を育てていくためには、地域に住むプロの芸術家や文化団体、地域のアマチュア団体などの自主的な活動の積極的な支援や、文化団体相互のネットワークづくりなどによって、地域の文化活動を活発化するため、地域の文化活動を活性化するための仕組みをつくっていかねければならない。また、地域に住む人たちがそうした活動と気軽に接する機会をつくって、文化についての関心を高めていくことも大切である。そのために横浜市では、さまざまな活動

の場を提供する施設（ハード）の整備によって地域の個性を育てるだけでなく、それらを伸ばしていくためのプログラム（ソフト）の充実にも力を入れている。平成三年七月に設立された横浜市文化振興財団は、市民文化事業のいっそうの活性化を目的に、市民、企業の協力を得ながら、文化施設の効果的な管理・運営、コンサート開催などの文化事業の実施、人材の育成、文化情報の提供など幅広い活動を行っている。

地域に生まれ、地域に根ざした文化を育てていくことは、これからの横浜文化の形成にとって重要な課題のひとつであることは間違いない。

また、これまでも写真や演劇、洋画、ジャズなど、開港地横浜を日本発祥の地とするものによって、横浜文化は特色づけられてきた。それは進取の気風と開放性に富む横浜市民気質という都市のアイデンティティを形成する源になっている。

開港以来、近代の窓口として、さまざまな人とモノの交流による文化の集積を得た横浜は、魅力あるウォーターフロント、緑豊かな丘などの環境的資源を背景に、個性豊かな横浜文化を培ってきた。今後もこうした横浜文化を受け継ぎ、さらに発展させていくためには、優れた水準の文化・芸術に市民が身近にふれあうことのできる場や機会をつくること、海外との文化交流を市民レベルで推進していくことが大切であろう。

そして、横浜の歴史的な特性を生かし、横浜から新しい文化の風を各地に吹き送れ

るような力を持つことが、今後の横浜文化にとってのもうひとつの課題である。

### 生涯学習のための さまざまな取り組み

また、社会の高齢化、高学歴化や余暇時間の増大などの社会構造の変化を反映して、いま市民の間に生きがいや楽しみが得られ、知識欲を満たしてくれるものへの欲求が高まっている。一方、国際化、情報化の激的な伸展は、市民に新しい知識や技術の習得を求めている。さらに、学歴・知識偏重社会が子どもや社会に与えているさまざまな弊害に対し、もっと多様な価値観、能力、個性を持った人間が育つような教育環境を求める声も高い。

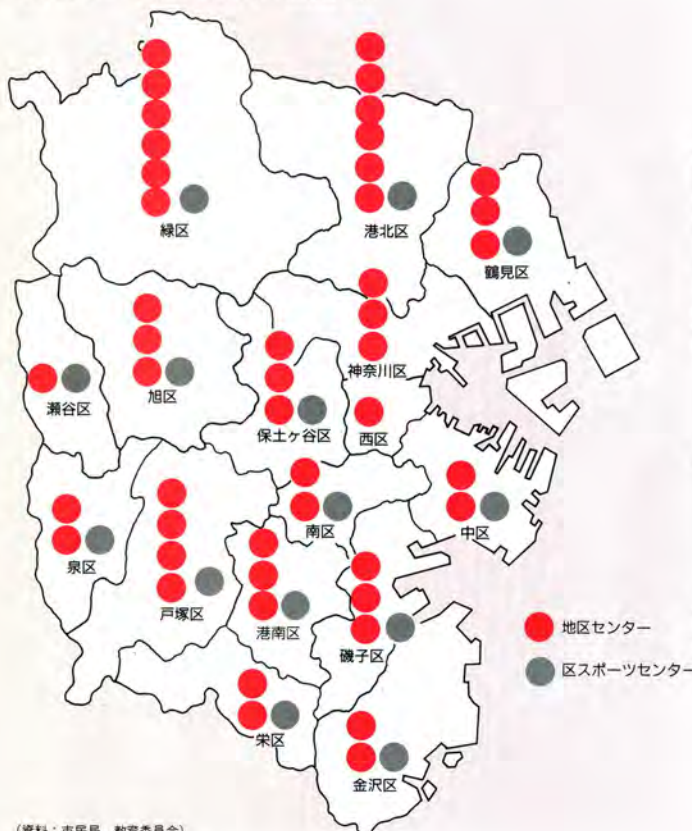
こうした社会状況の中でいま求められているのは、大人から子どもまですべての市民が、いつでも、どこでも、生涯にわたって学ぶことのできる学習環境の整備であろう。家庭や地域で、あるいは学校や職場であらゆる生活の場で市民一人ひとりが主体的に学ぶことによって、個性豊かで主体性のある人間となる。こんな市民を育てていくためには、生涯学習の活発な展開と持続に向けて、家庭、学校、地域や、民間と行政との役割分担や連携がしつかりなされていなければならない。

そして、生涯にわたって充実した人生を楽しみたいという、こうした生涯学習へのニーズに応えるためには、まず身近に気軽に学べるような場を整備する必要がある。「三万人アンケート」の自由記載欄に寄せ



すばらしい芸術を「見る」文化活動が「創造する」文化活動につながる

■地区センター・区スポーツセンター区別箇所数



(資料：市民局、教育委員会)

られた市民の声にも、「スポーツやカルチャーの施設が、数・質ともにもっと充実したらと願っています」（六十代男性）。「自主活動を進めるためには、老人会館、成人会館などの施設が充実するなど、学習する場所が必要ですよ」（六十代男性）など、学習の機会と場の拡充を求める声が強かった。

こうした市民の声にこたえるため、横浜市では地域の人々の学習とふれあいの場として学校の空き教室を利用したり、学校の新設や改築のうちに「コミュニティ・スクール」の整備を進めている。コミュニティ・スクールは、これまでの放課後や日曜日の学校施設の開放をさらに一歩進めて、研修室（多目的室、和室、ミーティングサロンなどを設け、学校の授業が行われている間も、地域の人々が利用できるようにしたものである。管理・運営は行政や地域の人々の協働で行われ、市民に自主的な活動の場を提供するとともに、各コミュニティ・スクールごとにそれぞれ自主講座を企画して、市民の活動のきっかけづくりを図っている。ところで、なにかを学ぶためには、図書館も重要な役割を果たす。「市民生活行動調査」で、「休日によくする活動」として「図書館に行く」と答えた人も少なくない。そのうち七三・六％の人が自宅周辺に住んでいる区内の図書館を利用しているという。生涯学習を効果的に進めていくには、身近なところに図書館のある環境が必要とされるのは間違いない。横浜市では、区図書館を各区に設置したり、地区センターに図書コーナーを設置するなどして、いつでも

読みたい本が手に取れるように、各種の図書サービスを行っている。

今後は、それぞれの蔵書のいっそうの充実を図るとともに、平成六年に開館予定の中央図書館を中心としたネットワークづくりなどを進め、多様な図書ニーズに応えられるサービス体制を確立していく予定である。

### 高度化する市民の学習意欲

さまざまな学習意欲の掘り起こしが進めば、当然、より高度な、より専門的な分野への市民の学習参加も求められるようになるだろう。市民の高度化によって、生涯学習の方向も、いま多様な高等教育の機会の確保や内容の充実に向かっている。

そうした要望に応え、高等学校を地域に開かれた学習の場として活用してもらおうと、横浜市では高等学校公開講座を実施している。「枕草子の美について」「パソコン入門」など、文化・スポーツなど多岐にわたる講座が開かれており、平成四年度には、十九講座に七五八人の市民が参加している。

また、大学の研究成果に広くふれる機会をつくらうと、市内の大学の協力を得て、横浜社会人大学公開講座も開催している。

「新しい国際秩序と日本の役割」「地域社会と法」など、社会変化に対応した新しい知識を伝え、大学の専門性を生かしたこの講座は、平成四年度に十三講座開催され、一七〇五人の市民が参加している。



学ぶ知識も、時代の変化とともに高度なものになってきた

地域に開かれた高等教育機関の実現などによって横浜市民の学習ニーズに応え、豊かな知識と幅広い視野を身につけていくことは、地域社会のいっそうの活性化を実現するだけでなく、これからの横浜のまちづくりに欠かせない力となることだろう。

創造的で心豊かな市民生活の実現は、文化のまち・横浜のイメージを確かなものにしていくに違いない。